



山口大学のビジュアル・アイデンティティに期待する



山口大学 学長 加藤 紘

皆の気持ちを凝集した外部に自己を顕示するには、組織全体で共有できる象徴、即ちビジュアル・アイデンティティが重要となります。

特の風土の中で生み出された数々の業績と共に、私達の誇りです。この個性のビジュアル化は、次に大きく羽ばたくべき山口大学にとって、この上ない力となるものと確信しております。

本学の素晴らしい理念をビジュアル・アイデンティティに

皆の共感を呼ぶビジュアル・アイデンティティを

米国では、事あるごとに国歌を歌い国旗を掲げるようですが、民族の坩堝と言われる米国で国民の連帯を保つには、国の象徴である国歌や国旗で皆の意識を凝集する必要があるのだと聞いております。日本では祝日に国旗を掲揚する家庭さえ珍しくなりましたが、その日本でも先の戦争中はこぞって国歌を歌い国旗を掲げました。

人でも組織でも元気のいい時は、他人の思惑など気にしなくとも、また理念や計画など意識しなくとも、どんどん新しい活動が生まれます。山本夏彦氏の最近の著書に「健康な人は本を読まない」とありますが、その通りだと思います。しかし足元が不安になると、誰しもどこかに気持ちの拠り所を探したくなり、また同志と連帯感を深めたくなる様です。特に非常時に限ることでもありませんが、

ましてや大学は今非常時です。18才人口が減少し、国民の意識が地域から世界に広がる中で、法人化を迎えます。皆の気持ちを凝集し、また社会における大学の認知度を増すために、特にビジュアル・アイデンティティが欲しいと思います。勿論、ビジュアル・アイデンティティは、大学の理念や将来像、伝統や実績など大学の個性に基づくもので、大学自体に魅力がなければビジュアル・アイデンティティも影が薄くなります。しかし良いビジュアル・アイデンティティがあれば、それだけ大学の力が強化されることも事実です。

幸い、山口大学には「発見し、はぐくみ、かたちにする 知の広場」という素晴らしい理念があります。若者に無限の可能性を自覚させてくれるこの理念は、山口独

社会や人の意識が変化し続ける中で、永く万人の共感を呼ぶビジュアル・アイデンティティを策定するのは至難の業と思います。しかし美術館の絵画の前で百万弁の解説を聞かされるより、感動の溜め息の方が理屈ぬきで周囲の人に共感を与えます。山口大学に対する愛情が素直に表現されたビジュアル・アイデンティティならば、きっとみんなの共感を呼び、一体感を作り、大学の方向性を生み出す原動力となると確信しております。大いに期待し楽しみにしております。



個人化する時代のV I戦略 山口大学に、いま、なぜ、V I

広報活動専門委員会 委員長 小谷 典子
人文学部 教授



発見し、はぐくみ、かたちにする 知の広場・・・

が、山口大学の理念であることを、山口大学の学生、教職員のどれだけのものが認知しているのでしょうか？まして、山口大学関係者以外への認知は、いまのところほとんど期待できません。

山口大学が、平成16年度の独立行政法人化を目前にして、一つの組織体と化すことは、現時点では大きな困難を伴うと思われる。それは、個人化する社会という時代の重みを感じるからです。

個人化する時代

経済的な豊かさの代償として、伝統的な地域コミュニティは解体し、豊かさを支えてきた大規模な企業組織も次第に制度疲労をきたしはじめ、今日では最も小さな集団である家族さえも、アイデンティティを持つ対象ではなくなってきています。家訓といった固有の理念を持たない家族では、家族メンバーに対する相互の責任感は薄れ、家族はばらばらに個人化してきています。

利益を拡大するという明確な理念をもつ企業の場合には、企業に対する貢献が、収入や地位の上昇のように目に見えるかたちで反映

されることもあって、従業員が企業にアイデンティティを持つ状況をつくりあげることが可能です。

山口大学のアイデンティティ

しかし、山口大学のような地方にある国立大学の場合、大学独自の理念のもとに運営されるよりは、どのような場所で学ぼうとも同じような教育を受けることができる環境を用意することに、これまで専念してきたように思われます。したがって大学が、特徴あるひとつの組織体として変身するには、相当の時間と努力が必要となるでしょう。

独法化にむけて大学が大きく変わらざるをえない今日、「発見し、はぐくみ、かたちにする」という理念のもとに、山口大学はアイデンティティ（すなわちUI）を確立していく必要があります。この言葉としての理念は、UI形成の要です。この理念を基軸にして、大学が目標を設定し、その目標を計画的に実行していくプロセスで、アイデンティティは形成されていきます。

ビジュアルなアイデンティティの効果

その際に、より効果的な手段として、目に見えるシンボルマーク、ロゴタイプ、シンボルカラーといったビジュアルな要素を活用することが考えられます。山口大学のビジュアルなアイデンティティ（すなわちVI）は、山口大学の関係者が、山口大学を顕在的に認知する手段であるとともに、それ以外の大学に関わりを持っている

ひとびとにも、山口大学の存在を知ってもらうことに役立ちます。

山口大学に入学しようとする受験生や保護者、山口大学の学生を採用しようとする事業所、山口大学と共同研究しようとする自治体や企業はじめ、さまざまなメディアで接点を持つ人々・・・、関係者は大げさに言えば、大学のホームページを通じて、地球の裏側にまで広がっています。その関係者たちに、ビジュアルなシンボルを介して山口大学が認知されていきます。山口大学のVIを策定しようとする事業の意味は、ここにあります。

組織強化のために

シンボルを介して組織がいかに強く結束するかは、サッカーのワールドカップで、日頃は日の丸掲揚を考えもしなかった若者が、日本チームを応援する顔に、「日の丸」をペイントしていたことによっても証明済みです。

法人としての大学は、教育や研究、学生たちのサークル活動など多様な場面で、今以上に競争状況におかれることが予測されます。ビジュアルなシンボルは、組織の結合力を高めるためにも不可欠です。

VI策定にあたっては、大学構成員が策定プロセスから関心を持ち、何らかの形で関与して、納得のいくマークやカラーが作られていくことが望まれます。もちろんそれが、専門家の目から見ても、ハイセンスなものであってほしいものです。

TEL : 083-933-5236

E-mail : otani@yamaguchi-u.ac.jp

VIデザインとその管理・運用

広報活動専門委員会 専門委員 木下 武志
工学部附属ものづくり創成センター 副センター長

私達は、日常生活の中で無意識かつ頻繁に企業や各種団体のVIを見ています。それを何か選択する場合の判断材料にしていることは間違いありません。これからVI活動を担う者は、VIを活用している側の背景にある、他と区別させ自己を選ばせるようにするという操作があることに注意する必要があります。

以下、美術大学やデザイン関連企業でデザイナーとしてのトレーニングを受け、実務経験を通じデザイナーとして機能を持った者としての私的視点から述べさせていただきます。

VIのデザイン

現在、大学に所属する私のデザイン対象はさまざまに拡大していますが、その中の研究応用の一環として大学、研究センター、研究会のVI（シンボルマークやロゴマークと使用マニュアル）のデザインシステムの考案・制作があります。皆さんの目によく触れるものとして、学内では工学部（図）やベンチャー・ビジネス・ラボラトリーからの依頼された業務に携わりました。

VIはポスターやTVCMに比べると一見簡単そうに思えてしまいが、ビジュアルコミュニケーションデザインの分類の中では、最もハイレベルは対象の一つとなり制作期間も1～4年程度かかります。対象がシンプルであるために逆にごまかしの効かない、デザイナーのデザイン能力が明確に露呈する内容となり、上述したように長い試行錯誤を要します。例えば工学部の場合、期間は約1年半、ラフスケッチの状態でも400種類以上のアイデアを出しました。その中から絞り込んでいって現在のもの

のに至っています。また、デザインしたまま放ると時間経過とともに効果が薄らいでいきます。実際、私は工学部のシンボルマークを3年間の間で3度、デザインをマイナーチェンジしています。一般人にはほとんど気付かませんが、生き物のように労力・予算をかけて品質を保持する必要があるのです。



山口大学工学部

VIの管理・運用

高度情報化社会において、視覚情報は最も重要かつ強力な「武器」と言えます。また、この武器は「諸刃の剣」でもあります。いくら優れた武器にでも、手入れをしないと使えません。刀は錆びますし、銃は弾が出なかったり、暴発したりすることもあります。これと同じように、視覚情報が正しく効果的にデザインされ、運用・管理されていれば、他の組織との差別化を起させたり、組織を活性・発展させたりすることが可能となります。しかし、そうでない場合にマイナス効果が生じ、これが怖いのです。わざわざ費用や労力を使って自分の首をしめているようなものです。イメージダウンの素を広げ、繰り返すことになるのです。「たかが、マークが変わったくらいで」と思う人が大半でしょうが、実はそういう人ほど、デザイナーやデザインを活用している企業からは「思う壺」なのです。

VIはUIシステムの主要な役割を果たすものですが、現状の国立大学では企業のCIシステムのよ

うに一定のルールが決まっています。この状況により、特に憂慮すべきはデザインの統一感の保持だと考えます。統一感が保たれてこそ、VIはその効力を発揮するからです。しかし、大学組織ではこれが困難です。何故なら、企業や私立大学のようにトップダウンで決定する強制権を持っていないため、建て前の学部自治などがこれに抵抗するからです。この部分はこれからの法人化によりそうは言っていられないでしょうが、相変わらずという部分も残るでしょう。ですから、企業とは異なる我々の所属するような組織でも管理・運営できるルールを新たに構築しなければ、いくらデザイン的に優れたVIを用いたとしても逆効果をもたらす危険性を孕んでいるということに注意しなければなりません。

VI活動を「封筒や名刺やなんかには何かマークが付くようになるだろう」程度の認識で考えているとその効果が期待できません。使用する組織全員の正しい理解が必須条件です。個人的には、この活動が学内で「デザイン」とは何か、「芸術」と何が違うのかを再確認するきっかけになることを期待しています。

工学部内ベンチャービジネスラボラトリー オープンラボ307室
TEL&FAX：0836-85-9718
E-mail：Kino1020@yamaguchi-u.ac.jp



ベルリン、パウハウス資料館にて
左端が筆者

VI戦略の行動計画

広報活動専門委員会 専門委員 堀江 穆
アドミッションセンター 教授



「最近、山口大学は変わったね。」
「学生達も生き生きしているよ。」
市内を歩いていて、市民の多くの人達がさりげなく、この挨拶言葉を使ってくれたら嬉しい。それが山口大学の目指すVI戦略です。戦いに臨む訳ではないから、「戦略」というキーワードはいかがかとも思うが、そのくらいの覚悟を持たないと実現は難しいとも思います。

団体戦から個人戦の時代へ

戦後の日本で、高度経済成長期には、国際的な比喩として「日本株式会社」とか、「護送船団方式」とかという言葉が使われてきました。団体戦は得意だが、個人戦となるとまるでダメ。オリンピックなどの檜舞台でも、選手は萎縮して実力が出し切れない状態が続きました。

いま社会の情勢は、団体戦よりも個人戦に強い日本が生まれています。サッカーでも、野球でも、世界に通用する日本人が多数現れてきています。

大学の運営も、国立大学という団体戦で通用する時代ではなくなりました。国立大学の法人化移行

は、国の財政事情が悪化した事による結果と受け止めることも出来ませんが、現実の世界の進歩は、そんな「受け身」で対応出来る状況でないのも事実です。この環境を「攻めの姿勢」で切り抜ける策が、いま求められています。

「大学って、一体何だろう。」
その中で、「山口大学とはどういう大学であるべきなのだろうか。」
その疑問の解決からVI戦略の行動計画を始めました。

山口大学は、過去50年にわたって、全国一律の基準に則って運営される「国立大学」でした。建学の精神に向かって、全員が目的を了解し、納得して行動出来る私立の大学ではありません。基準を満たす、つまり、最低ラインを確保するために全員が智恵を絞り、工夫を凝らして運営されてきた大学です。山口大学が法人化されると言っても、まだ新しい法律が出来た訳ではありません。今の段階で、道筋を正確につかむことは出来ませんが、現実を事実として受け止め変革を目指して行動します。

計画の策定に向けて

その第一歩は、「信頼関係の構築」です。冒頭の挨拶言葉に山口大学が登場するには、まず、街の人達との信頼関係が維持されていなければなりません。そのためには、素晴らしい研究が行われ、学生達が楽しく勉強できる場が確保され、社会（地域）の人達も、この大学が山口にあって本当に良かったと思わせる内容を提示しなけ

ればなりません。

そのために、いま必要なのは、「単純化」というキーワードではないでしょうか。総合大学である山口大学は、発信する情報も膨大で、複雑多岐にわたっています。そのひとつひとつを単純化して示し、多くの人たちの理解を得る努力を果たさなければなりません。

作業スケジュール

計画の策定作業を、おおまかに三つに分けて作業を進めます。最初がVI戦略に対する理解促進期間、そして、計画の周知期間、さらに、運用、実践の期間とします。この間、広報活動専門委員会によって、一般の学生や教職員も参加したワーキンググループを編成し、作業を進めることとなります。

第1期

理解促進期間（5～12月）

5月～7月末

<問題点の洗い出し>

この期間、問題点の洗い出しとデザインの策定が主たる作業となります。山口大学にとって、いま何が課題で、それをどう克服したらよいか、議論を重ねます。その際、昨年実施した高校生と在学生のアンケート調査の分析を行います。新たに全教官・全職員を対象とした追加調査なども行うこととします。この場で、指摘される問題点を解決するための目標を設定し、公表したいと思います。

7月～10月末

<デザインの開発>

問題点洗い出しの終盤を迎える7月はじめから検討に入り、9月末までに第1次のプレゼンテーション・デザイン案（10案程度）をとりまとめます。さらに10月末までに第2次の案（3案程度）を提示し、審査、投票などの方法で意見の集約を図ります。

11月～12月

<デザインの決定・シンボルマークの発表>

新しいデザインは、学内手続きを経て11月には決定し、年内に公表します。

この間、アプリケーションのアイテム調査を実施し、名刺や封筒、便せん、学生証、ユニフォームなどの備品関係、施設への表示、掲示板、車両マークなどのサイン関係、さらに、大学案内や各種パンフレットなどへのデザイン展開を検討します。

第2期

デザイン等の周知期間（1～3月）

1月～3月

<アイテムデザインの作成>

新たに策定したデザイン、スクールカラーなどをもとに学部別、学年別などのデザインシステムの開発を行います。

1月～3月

<マニュアル作成と管理運営>

この期間、同時に並行してデザイン管理の方針を決定し、今後の管理運用のためのマニュアルを作成します。

第3期 UI戦略の実践

4月以降<管理運営>

VI戦略活動の具体的な実践活動に取り組みます。

戦略から戦術、そして作戦

学生達は、どんな理由があるにせよ、山口大学で4年間、または6年間の学生生活を送ります。山口大学で、いま学ぼうとする若者たちに、人生で最も有意義な生活を送らせることが出来なければ大学の存在価値はありません。

例えば、東京、大阪といった都会の生活にあこがれる若者たち。都会は素晴らしいところで、学生たちの住む山口は、何故ダメだとされるのでしょうか。世間の風潮がそうであるなら、逆転の発想を掲げて、田舎である山口で学ぶからこそ都会との有意差を発見する事ができます。そうしたひとつひとつの課題に対して、さまざまな案を創造することが、行動計画を策定する私たちの責務となります。

新たに発見した山口大学の魅力を、はぐくみ、かたちにする。そ

して、生まれた個性を社会に還元する。そして、このことを十分に活かすことが出来る山口大学をつくらなければなりません。

もちろん、計画の策定にあたっては、山口大学の論理だけで作業を進めることは出来ません。基本的な案を策定した後、学内関係者の意識調査、あるいは地域社会の人たちが求める大学像を追跡調査し、その意をくみ取る戦略の設定作業が必要となります。

さらに、山口大学の入試に挑む高校生、小中学校、高校の先生たち、卒業生を受け入れる企業・団体との信頼関係、また、新たな分野を開拓していく企業などとの産学連携、地域にあって生涯教育を求める人たちとの信頼関係の維持、発展…。その中で具体的に現れる課題を処理していくのが戦術の設定です。思えば気が遠くなるほど遠い道のりです。

今回のデザインマークの設定は、一連の作業を「天馬のごとく一気に走り抜ける」手段（作戦）として提示されるもので、マークを作ることそのものが目的ではありません。「世界で自分が参加しているたったひとつの大学」であることをみんなで確認する。さらに、共通した危機管理意識を持つことによって、全員が納得する行動計画をつくることが目的です。作業の進行にあわせて、より多くの人たちの参加を求めます。（了）



VIづくりのための意識調査から

広報活動専門委員会 委員 坪郷 英彦
人文学部 教授



1. はじめに

国立大学船団が解かれ、個々の船がそれぞれの道を歩みはじめなければなりません。今、そのマストに掲げる旗を作ろうとしています。これまでの地方国立大学のイメージを守るにせよ、新たな出発をアピールするにせよ、教職員・学生の意志をまとめ、形と色に表現する必要があります。

本学では2001年度から山口大学のUI (University Identity) 確立に関する事業を2カ年計画で進めています。2002年度は休止し、2003年度に継続の作業に入っています。UI確立は一つの運動として考えられ、2000年4月に制定された理念・目標の言葉と密接に関連するVIづくりが具体的な事業内容となります。VIとは形(シンボルマークやロゴマーク)と色(イメージカラー)を基本とし、その使い方も含めたデザインシステムのことです。2001年度の調査によって山口大学らしさ知り、これを元に2003年度にVIを決定する作業を行うという大きな流れで進んでいます。シナリオどおりに行けば2004年はじめに新しいVIを対外的に発表する事が出来るはずです。

2001年度は山口大学らしさを

知るために高校生、在学生、地域社会の人々を対象として山口大学に対する意識調査を行いました。ここではそれらの調査の概略を報告します。調査はベネッセコーポレーションに在学生満足度調査、高校生の意識調査、地域社会意識調査の3つを委託しました。

2. 在学生満足度調査の概要

ベネッセの全国調査(2001年実施)と同じ設問に、フリーアンサー欄を加えた内容の調査を行いました。その目的は在校生の大学に対する満足度を知ること、他大学と比べての強み、弱みを知ることの2点です。

設問の構成は1.大学・学部の選択要因、2.入学前の「したい度」と入学後の「取り組み度」のギャップ、3.大学入学前とのイメージギャップ、4.大学総合満足度、5.大学・学部評価、6.進路展望、仕事観について、7.「将来の山口大学へ期待すること」に対するフリーアンサー欄からなり、多岐にわたる構成となっています。

総体的には地方の国立大学に共通してみられる傾向が出ているが、ここではVI作りに関連すると思われる側面に限って拾い出します。

「大学・学部の選択要因」に関する設問に対して

- ・大学への進学理由は第一に学び志向、特に「専門的知識や技術を身につけるため」が高く、続いて実利志向、特に「安定した職業に就くための学歴」です。男女差では女性の方がはっきりした志向を持って進学しています。

全国の大学と比べると学び志向が弱く、実利志向や何となく進学したという傾向が強く出ています。

- ・進学先の決定理由をみると学生は自分の偏差値に合った大学、受験科目にあった大学を選び、続いて希望専攻分野の有無で選んでいます。その他の理由として国立大学であるから授業料が安い、総合大学のイメージをかうが特質として挙がっています。出身地別にみると、山口県内の学生は自宅通学が出来るメリットを考え、九州沖縄の学生は単身での生活をメリットとして選んでいます。九州沖縄の学生は総合大学のイメージで選んだ比率が高いようです。
- ・現大学進学が決まった時の気持ちや入学してからの満足度を聞くと6割が満足した気持ちで入学していますが、4割は不満足な気持ちで入学しています。山口県出身に限ると70%が満足した気持ちで入学しています。全国国公立大学の満足率は83%で山口大学の場合と大きく開きがあります。
- ・大学学部を決める際、影響を強く受けたものは高校の先生の勧め、入学案内を読んで、家族の勧めなどファジーな誘いによる率が高い、教育理念に感銘してとか、直接先輩に勧められてなど積極的な選択要因は低い結果となっています。ファジーな誘いは特に女性の率が高く出ています。
- 「大学入学前とのイメージギャップ」に関する設問に対して
- ・入学後したいと思ったことと実際に取り組んだことには大

きな差が見られます。専門の授業を学ぶこと、資格を取得することを目指していたが、入学後は目的が達成されていない傾向が強いということです。

「大学総合満足度」をはかる設問に対して

- ・自然環境の満足度が高く出ています。続いて大学全般に対する満足が高いものの全国と比較すると低い。一方、施設の充実度、卒業後の進路支援、授業システムへの不満度が高く出ています。

「将来の山口大学へ期待すること」に対するフリーアンサー現状に対する不満、現実的な改善要望がある中で、将来のイメージを語るものもあります。その主なものを列挙します。

- ・社会に対して開かれた大学に
- ・地方の総合大学として地域に根ざした大学に
- ・地域・人の環を大切に
- ・国際交流の盛んな大学に
- ・活気ある大学に
- ・個性的な大学に
- ・田舎っぽさを残しながら勉強に集中できる環境だ
- ・ゆったりとした大学だ

「IPS尺度分析」の結果からこれは学生の自立度と社会への関心度から4つの類型に分け分析をおこなったものです。単純集計には見られない結果が散見されます。

- ・アイデンティティの確立度の低い学生が多い。適切なアドバイスを行う必要があります。
- ・入学時の期待度と入学後の実際の取り組みのギャップが低いのが友人との交流です。期待どおりの交流を結んでいるということです。
- ・学習領域や授業内容に対する満足度が高い。併せて授業・教育システムについて、

「インタラクションの起こる準備(しかけ)」、「課題解決力育成の取り組み」に対する評価が高く出ています。これらは先生と学生の親密度が高いことを示すものです。特にゼミで特徴的な他者の考えから学ぶ、発表・プレゼンの機会、他者と協力して学ぶなどを内容とする「インタラクションの起こる準備(しかけ)」に対する評価は高い。少人数教育の良い面が出ています。

2. 高校生意識調査の概要

調査対象は山口県内が3校、福岡県が1校、広島県が1校、島根県が1校でした。この6校について2年生の3学期に調査を実施しました。この調査では進学希望の生徒がもつ志望大学と山口大学のそれぞれのイメージを把握することができました。

- ・山口大学に対する感性的イメージは「親しみやすい」、「あたたかい」の項目が高く、続いて「前向き」、「明るい」が続きます。これに反して「カッコいい」、「進歩的」のイメージは低い。一方、志望大に対しては「明るい」、「前向き」のイメージを強く持っています。
- ・志望を決める際は教育システム、学部卒業後の展望などの「学習要件」を重視して志望を決める率が高い。実際に山口大学に入学した大学生に対して行った同じ質問からは、学習要件重視の率が下る結果が出ました。ロケーション重視、イメージ優先が山口大学の学生では高い率を占めています。

3. 地域社会の意識調査の概要

県内の企業、公務員、個人事業所等幅広く人選しインタビューを実施しました。山口大学に対する

特徴的なイメージや意見を抜粋して列挙します。

- ・トップの発信力が大切。
- ・大学は地域振興のためにあるということ。産学連携・文化発信・情報交流
- ・地域に開かれた大学を
- ・学生は地味・おとなしい・国立大生のイメージ
- ・高度な教育への期待
- ・地域が一緒になって学生を育てたい
- ・地域社会でリーダーシップを取ってもらいたい。

4. 形に定着するために

満足度調査、意識調査からは様々な事が読みとれます。調査結果には勿論現在の山口大学に満足しない部分も含まれますが、本文ではVIづくりのための前向きな方向性だけを取りあげました。調査報告書にあたると学生の各学部に対する意識など細かな現状分析も可能であることを申し添えます。

以上の調査から大学の理念「発見し、はぐくみ、かたちにする知の広場」にそう、形・色を生み出すために、いくつかの言葉が浮かび上がってきます。これを現段階でまとめるのではなく、この段階で造形の専門家に託し、一つの形・色を生み出してもらおう段取りです。

2003年度は民間のデザイナーにVIづくりを委託する計画です。外部のデザイナーに委託するのは配慮の行き届いた質の高いVIづくりを行うためです。もちろん、具体的作業は教職員・学生と出来るだけ意見交換を行いながら進める予定です。

山口大学のVIを考える

大学院理工学研究科 数理科学専攻 2年 原 博子

私は先生方や友人に恵まれ小学生を対象とした算数ソフト「算数バーチャルタウン～広中平祐先生がやってきた～」の開発・普及活動を行ってきました。このプロジェクトは多くの機関や企業からも支えられ、第1回4大学間「学生交流自主的・実践的研究プロジェクト」にも選ばれています。また、理学部主催の「サイエンスワールド」でもブースを出させてもらい、小学生やその保護者の方から面白いとの声を頂きました。ソフトは2年前から無償で毎年200部を中国地方の公共機関を中心に配布

しているのですが、CDのジャケットには内容に関する想像はできても、山口大学のカラーが出ていません。もっと早くVIがあったなら、表紙にはっきりと山大VIを入れたと思います。なぜなら、この算数・ソフトに関係する活動は山口大学に支えられ、プロジェクトのメンバーは山口大学に在学していることを誇りに思っているからです。

私たち学生は今、大学で山口大学のVIを考えているということさえ知らないのではないのでしょうか？これまでのVI同様、一部の

人だけで盛り上がるVI運動では、また新しく作られたVIも忘れられてしまうと思います。そうならないためにはまず、山口大学に関わるすべての人に広く知られること、そのために宣伝することが必要です。作られた後は、大学生でもなるべく自由に使えることが大切だと思います。



Visual Identity ?

農学部生物資源科学科4年 友廣 大輔

おそらく他の方々は独創的な提案をされていると思いますので、私は少し違った視点からVisual Identityを見てみました。

一般の学生に「山口大学のVisual Identity (VI) 策定への取り組みを知っていますか」という質問をして、果たして何人から“はい”という回答を得ることができるでしょうか。少なくとも私は“いいえ”という答えしか返せません。また、VIが大学のシンボルマークという説明を聞いても、校章が新しいシンボルマークに姿を変えただけなのではないかという発想

にしが行き着きません。実際のところ、私をはじめ大部分の学生には、VIについての趣旨を理解していない者も少なくないのではないのでしょうか。そのため、なぜ校章に代わるようなシンボルを策定しなければいけないのか、そして、新しいシンボルをすることによって何がどう変わるのかということを具体的に喧伝し、その考え方を定着させ方策を考えるべきだと思います。VIが非常に有益なものであったとしても、それが有益なものであるという概念が多くの人に認知されて、初めてVIが秘め

る可能性を完全に発揮できるのではないのでしょうか。

ですから現状においては、“学生の立場からこんなVIを望む”というテーマでアイデアを出し合うというよりも、どうすれば“VIが有用であるという概念”を学生やより多くの人の共通認識にできるかというもっと根本的なところの話し合いを深めるべきだと思います。

大学に求められるVI

人文学部社会情報論コース4年 森重 瑛美



現在、山口大学のロゴマークが分かる学生はほとんどいないのではないだろうか。余り活用されていないこのマークを、私は学生証以外で見たことがない。他の多くの人たちも同様だろう。学生や地域住民の意識に、山口大学のVI (Visual Identity) はほとんど根付いていないといってもいいと思います。

来年度からの法人化をひかえ、

総合大学としての山口大学の個性を表すロゴマークを刷新するこの機会に、是非「山口大学といえばこのマーク」と思えるほど定着し、浸透するマークを作ってもらいたいと思います。

現行のマークは、その形から何かを連想したり、意味を見つけることが難しく、親しみをもてるような形ではなかった。何がどう山口大学を表現しているのか、ピンとこない。学生をはじめとする多くの人にマークが定着しなかった理由もここにあると思います。

体育会系の幾つかのサークルには、馴染みのない大学のマークを使うことなく、自分達で独自のロゴマークを作り出し、サークルのVIを確立してしまったところも

あります。それは、サークルのもつ個性・カラーがロゴマークに分かりやすく反映され、マークを見たらそのサークルをすぐに思い浮かべることができたからではないだろうか。

山口大学という総合大学が持つ理念・信念を表現することは重要なことであるけれど、それだけのマークでは山口大学のVIが人々に定着するのは難しいと思います。山口という地域の個性、大学の持つ雰囲気というものも含めて、山口大学の個性なのです。

今回新しく作られるマークは、理念や目標だけでなく、誰にでも共感できる「山大らしさ」が反映されているものであって欲しい。

VIの意味を認識させるために

準硬式野球部(主務) 中谷 道人

私たち準硬式野球部ではユニフォームの左肩にこのVI (Visual Identity) を使用していますが、このマークに対して真剣に考えた人はほとんどいないでしょう。普段から身近にありながらあまり気にしていなかったこのVIですが、じっと見ているといくつか感じるがありました。

その中で一番強く思ったのは、自分たちは山口大学の学生だということです。当たり前の事ですが、この事を普段から意識している人は少ないでしょう。私たちには当

たり前のようにグラウンドを使い部活動を行っています。山口大学体育会の運営の下でこれが実現されていることを忘れてはならないでしょう。この事を数か月に一回でも認識することができればVIを使用した意味は十分にあると思います。

VIを策定するにあたってこの認識をより効果的にするためには、まず、山口大学のものであるということが明確であり、かつシンプルで覚えやすいものがベストであると考えます。次世代の山口

大学学生がこのVIに慣れ親しんでいくためには、多大な吟味の上で策定していかなければならないと思います。



ロゴマークに込める想い

ラグビー部 人文学部4年 佐藤 愛



我々ラグビー部は体育会の一員として活動しています。県内の学生リーグと社会人リーグに所属しています。一年を通じて様々な大

会に参加していますが、常に我々は山口大学という名前を背負っています。この名前があるからこそ、我々は活動できるのです。名前とは別にロゴマークがあります。

我々の部の特徴は、ロゴマーク入りのカバンを持っていることです。学内でも学外でも、そのカバンを持って歩いています。

ロゴマークには、我々の部の長い伝統と大学の伝統、そして大学と部活に対する熱い想いが込めら

れているのです。我々が望んでいるVisual Identityは、我々の熱い想いと伝統の感じられるものです。ロゴマークは常に背負っていて、常に見られているものだからこそ、我々自身をストレートに表現してくれるものが良いと思います。



印刷物のデザインの現状

多くの学部・附属施設からなる山口大学はそれぞれ個別に広報物や封筒などを作っています。それらは山口大学のイメージを受け手に伝える印刷媒体に他なりません。ここにその一部を示しました。それぞれ独自の考えでデザインされているので山口大学の統一したイメージは伝わりません。受け手である受験生、企業、地域住民にはバラバラなイメージが伝わっているわけです。全体の統一感と発行主体の独自性を生かすシステムデザインが必要です。

VI作りの中にはシンボルマーク・ロゴタイプ及びイメージカラー作りとともに、その応用としてさまざまな広報媒体の基本デザインを作ります。



事務局



人文学部



教育学部



経済学部



理学部



医学部



工学部



農学部



附属図書館



山口大学要覧



山口大学案内



人文学部概要



人文学部案内



教育学部概要



教育学部案内



経済学部概要



経済学部案内



理学部概要



理学部案内



医学部・附属病院概要



医学部医学科案内



医学部保健学科案内



工学部概要



工学部案内



農学部概要



農学部案内



TOPICS

公開討論会

国立天文台との共同研究 ～ 1年目の成果と今後～

藤沢 健太 助教授 理学部 自然情報科学科 物理学講座



国立天文台との共同研究と討論会

山口大学は宇宙の観測的研究という、単独の大学としては比較的珍しい研究を行っています。主な観測装置は山口32m電波望遠鏡（図1）で、この望遠鏡自体は国立天文台の所属です。本学理学部は2002年4月に国立天文台と共同研究協定を締結し、この電波望遠鏡を活用した研究を開始しました。



図1．山口32m電波望遠鏡。
ロゴの「NAO」は国立天文台の略称

共同研究開始からほぼ1年が経過した2003年3月7日、共通教育棟SCS教室にて「先端宇宙科学と山口大学」と題した公開パネル討論会が行われました。この1年間の研究成果を発表し、また今後の共同研究のあり方を討論することを目標としたもので、国立天文台から井上允教授、川口則幸教授、河野宣之教授の3名の教授を迎え、私を加えた4名の討論者、そして教育学部系長教授

の司会で行われました（図2）。主催者を代表して山口大学パラボラ懇談会代表の渡辺教授の開会の挨拶に続いて、加藤学長の挨拶をいただきました。



図2．公開討論会の様子。
左から、川口、井上、河野、藤沢、系長各氏

討論会では、藤沢、井上、川口、河野の各氏が最近の研究の話題を報告した後、司会者を含めて山口32m電波望遠鏡の役割を中心に討論が行われました。市民、教育関係者、通信業界関係者、学生、教員など約60名の聴衆が会場で聞き入り、また、市民からの質問・疑問に討論者が答える風景もありました。

山口の研究この一年

山口32m電波望遠鏡はもともとは通信用に使われていたアンテナです。昨年度は、研究のほとんどを観測システムの確立に費やして、システムの改造や調整、大気による天体電波吸収量の測定、アンテナの位置測定（図3）などの実験を行いました。10月には実験的なVLBI観測にも成功しています（図4）。VLBIとは電波干渉計技術の一つで、山口32m電波望遠鏡ではVLBI技術を全面的に使った観測を計画しています。この10月の実験成功は、研究推進上の大きなステップとなりました。また、山口大学独自の研究として小型電波望遠鏡を製作しました（図5）。これはインターネット技術を積極的に使った宇宙の観測を行うことを目指したものです。

この原稿を書いている2003年4月、観測システムはほとんど整備完了し、本格的な観測に使える

TOPICS

よくなるまであと一歩です。今年度は初めての観測成果を生み出す年度と位置付け、卒業研究・大学院生の研究とともに本格的な宇宙科学の研究に取り組んでもらいたいと思っています。



図3．携帯GPSを用いて、電波望遠鏡の表面で位置測定中

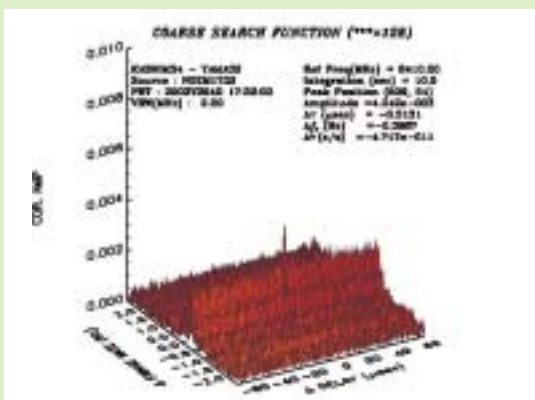


図4．VLBI観測成功！中央の山が観測成功したことを示す



図5．試験中の小型電波望遠鏡

山口大学を「宇宙を研究できる大学」に

こうして観測体制が整ってきた山口の電波望遠鏡を、どのように使って研究を行うとよいか、公開討論会では3つの提案をいただきました。(1) 国内はもちろん、韓国や中国など特に東アジアの各国と連携し、活動銀河中心核の研究を推進、(2) 月・惑星科学の研究がこれから大きく発展するので、山口大学も積極的に参加、(3) 情報ネットワークを利用した新しい研究方法を積極的に取り入れ、山口独自の研究を推進、というものです。

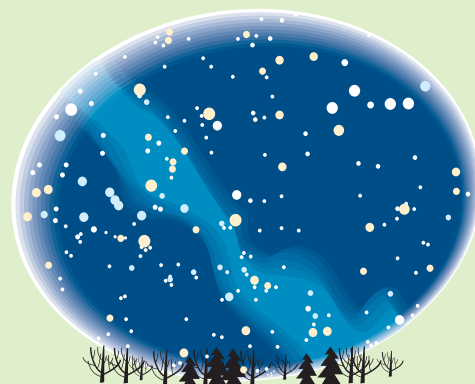
どの研究テーマも重要かつ最先端の研究を目指すものであり、また山口大学の果たす役割が大きく期待されています。また、ここでは述べませんが、宇宙について学びたいという学生の希望も強いのです。このような期待に応え、山口32m電波望遠鏡を中心として、山口大学を「宇宙を研究できる大学」にしていけたら、と考えています。

最後になりますが、この研究を支えてくださっている大学首脳部他多くの方々、KDDI他の機関に、この場を借りて感謝いたします。

TEL & FAX : 083-933-5673

E-mail : kenta@sci.yamaguchi-u.ac.jp

Homepage : <http://www.info.sci.yamaguchi-u.ac.jp/fujisawa/index.html>



TOPICS

女性診療

「女性診療外来」開設

松田 昌子 教授 医学部保健学科検査技術科学専攻

「性差に敏感な医療」

「性差」という言葉には、遺伝子や性ホルモンで決定されるSex differenceと社会的因子によって作られるGender differenceの二つの意味が含まれます。医学の領域では、産婦人科や乳腺外科、泌尿器科など一部の領域を除くと、これまで男女の性差を区別した研究は少なく、特に女性の健康に関するデータは少ないということがわかってきました。また、医療の現場では、医療提供者である医師と受ける側の女性患者の関係という観点では解決されるべき問題が多いことや、提供される医療の内容でも女性は男性に比べ十分な検査や治療がされていないという問題がアメリカを中心に明らかにされてきました。そのような背景から近年、性差に敏感な医療を目指そうという動きが活発になってきたわけです。

「女性診療外来が目指すもの」

女性患者と医師の間にはいくつかのギャップが横たわりますが、できるだけそれらを取り除いて、医療機関へのアクセスを容易にしたいということが第一の目的です。第二に、病歴聴取や診察に時間をかけ、患者の問題点を総合的に判断し必要な検査・治療を行うという、医療の原点に返った診療を行うということです。専門科や他院に紹介した後の経過まで把握する姿勢で医療の提

供をしたいと思っています。第三に、予防医学を重視し、患者の健康管理の継続を手助けすることです。家族の健康管理を担う女性の健康に対する意識を高め、健康を向上させることは、その家族全体の健康の向上につながります。さらに第四番目に、女性の健康増進のための研究を組織的に広げ、その成果を臨床現場に還元したいと考えます。外来開設前に、国内のみならず米国及びヨーロッパの女性医療の活動状況を視察してきましたので、それらを参考にして、山口大学の特色を育てていきたいと考えています。

「女性診療外来のスタッフと診療体制」

現在、女性診療外来には内科、精神科、婦人科、外科、整形外科、皮膚科の6科から女性医師ばかり11人が出務し、毎日誰かが診療している体制をとっています(表)。女性医師が診療することにより、女性患者と医師の間にあるギャップの少なくとも1つは取り除くことができ、また、多科の医師が対応するということにより、患者側からしますと1か所で必要な情報を得ることができるという利点があります。

一般の診療科と異なり、初診患者も予約制にし、一人の診察時間を30分以上かけていますが、患者の待ち時間を短縮し、焦らずに診察ができます。時間を充分かけ、患者が求める医療とは何かということを考えながら診療を行なうことは、高度化が進む医療の中でとかく忘れがちになってきてい



女性医師



附属病院薬剤師

TOPICS



女性診療外来待合室

る患者と医師の関係を重視した医療を回復させることにつながります。他の専門科に紹介する必要がある患者には説明し了解を得て紹介を行います。

女性診療外来では、医師の他、薬の服用方法や副作用については附属病院の薬剤師、生活指導や尿失禁や骨粗鬆症予防体操についてのアドバイスは保健学科の看護師・助産師資格を持つ教官、食事指導は附属病院の管理栄養士、運動指導は医学科の健康運動指導士の資格を持つ教官が行う体制をとっています。これらの人たちの役割は、健康を守るということが重要な要素となるこれからの医療の中では非常に大切になります。

「将来」

1. 女性診療外来を担当する上で培われた知識や技術を、病院を訪れる機会がない人たちのためにも活用してもらうため、公開講座や相談会を開きたいと考えています。また、職業を持っている人たちのために、週末の対応も計画中です。
2. 他の女性医療施設とネットワークを作り、情報交換を行い、活動の輪を広げたいと思っています。

TEL & FAX : 0836-22-2832

E-mail : matsudam@yamaguchi-u.ac.jp

	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日
担当医師	内科医師 産婦人科医師	内科医師	精神科医師 皮膚科医師	内科医師	外科医師 整形外科医師
診療内容	更年期症状、その他	更年期症状、その他	メンタル・ヘルス 皮膚科的症状	更年期症状、その他	乳房疾患、肛門疾患等 骨粗鬆症、腰痛、手足の運動障害
他の相談担当者	※看護師・助産婦 ※栄養士 ※薬剤師 ※健康運動指導士				

表 / 女性診療外来診療日程

TOPICS

研究成果

西条柿の発芽予測システムの開発

早川 誠而 教授 農学部 生物資源環境科学科 地域環境情報科学講座



農作物の生育、収量が予測可能となれば高品質、高安定多収が可能となります。一般に柿は発芽期や展葉期における晩霜に弱く、新芽や花が被害を受けて結実に著しい影響が現れます。山口県美祢郡美東町で栽培されている西条柿は、これまでに何度も春先の晩霜害による被害を受けています。晩霜害とは、耐凍性の急激な低下が起こる春季に発生する作物の霜による被害を言います。西条柿を栽培している美東町は地理的に秋吉台に近く、秋吉台の石灰岩地形特有のドリーネなどによるさまざまな規模の窪地や盆地が存在し、場所による特有の気象が出現し、それがそれぞれの場所の収量にも影響を与えています。霜害を軽減するためにいくつかの防除法があり、柿の生育ステージがわかれば、前もってそれに対する防除策を施すことができ、効率的な栽培管理が可能となります。本研究は、農業現場での活用を考えて、積算温度を用いて西条柿の発芽期予測システムの開発を行いました。これまでの研究をもとに総合的に体系化して予測を行った点が新しい成果であります。

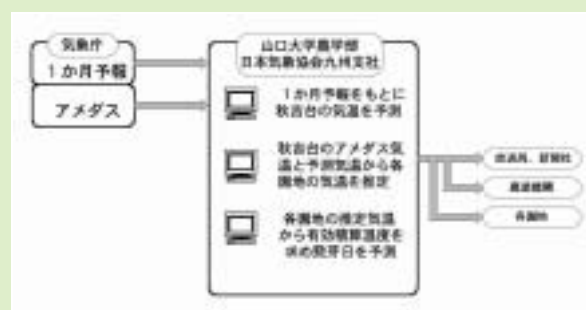
発芽予測システムの内容

本システムは早川研究室と日本気象協会九州支社、JA山口美祢西条柿生産部会と一緒に、

積算温度を使って西条柿の発芽を予測するシステムを確立しました。本システムは以下の特徴を有しています。

- ・有効積算温度から各園地の発芽日を予測する精度の高い式を見つけたこと。
- ・各園地の気温をアメダスデータから推定する関係式を導き出したこと。
- ・気象庁の1か月予報値を用いて精度の高いアメダス点の気温予測を可能にしたこと。
- ・西条柿以外にもいろいろな作物に応用可能なこと。

です。本システムを確立するには、有効積算温度を決めること、地域の気温分布特性を把握すること、気温の長期予測の三つが重要となります。



西条柿発芽予測システムの流れ

《有効積算温度》

有効積算温度は気温と生育との関係を説明するひとつとして用いられるもので、起算日（計算開始日）と基準温度（発芽のために作物が生理的に感応し始める温度）を決める必要があります。早川研究室の松山紘子は卒業論文解析において、いろいろな条件を考慮して起算日を2月1日、基準温度を5とした場合が発芽日の推定に最も適していることを見出しました。

TOPICS

《地域の気温分布特性》

美東町の各園地の気温分布特性を把握するために、各園地に温度計を設置し、秋吉台アメダス観測値との関係を調べたところ、各園地の気温が秋吉台アメダス観測値と高い相関があることが確かめられ、この関係式を用いることによって、アメダスの気温情報を入手できれば各園地のそれぞれの気温が推定可能となりました。

《気温の長期予測》

各園地における発芽は、3月下旬から4月はじめにかけて起こっていることがこれまでの観測から確かめられています。このため、3月上旬に予測を行おうとすれば、予測を行う時点から1ヶ月先までの気温の予測が必要となります。本システムは気象庁から毎週金曜日に出される1ヶ月予報の数値データを用いることにより、秋吉台の気温を推定し、平年値を用いるよりも精度よく予測できるようになりました。得られた秋吉台の1ヶ月先までの気温予報値を用いて各園地の気温を推定し、さらにこれを用いて各園地の発芽日が予測できることになりました。

発芽予測システムを用いて各園地の発芽日を推定したところ、発芽日の早いところと遅いところでは1週間から10日の差があることが確かめられました。これは局所的に暖かいところと寒いところが存在するため、わずか10km×10kmの狭い範囲にもかかわらず、同じ作物で10日近く差が生じるという結果は驚くべきことといえます。

《本システムの利活用》

本システムのような生育ステージの予測は、各園地の気象データと発芽日、開花日、登熟日などのデータが10年程度あれば可能であり、西条柿以外にも多くの作物に応用できます。また、一昨年プレス発表した気温のメッシュ予測システムを活用すれば、任意地点の作物の生育ステージ予測が可能となり、農業現場では、効率的で計画的な生産管理ができるようになり、経済的にも高品質、安定生産に向かったの夢がかなえられます。



霜害にあった西条柿の園地と霜害を受けた新芽



TEL & FAX : 083-933-5861

E-mail : hayakawa@agr.yamaguchi-u.ac.jp

TOPICS

学術交流協定

エアランゲン・ニュルンベルク大学と学術交流協定を締結

後藤 明利 国際企画課国際企画係長（現：総務課広報・調査係長）



エアランゲン・ニュルンベルク大学は、ドイツ南部の都市エアランゲン市（人口およそ10万人）と16km離れたニュルンベルク市（人口およそ50万人）に位置するバイエルン州立大学です。

大学の正式名称は「フリードリヒ・アレクサンダー大学エアランゲン・ニュルンベルク」といい、ドイツ国内で最も名前の長い大学です。

ドイツには国立大学はなく、ほとんどが州立大学です。私立大学は全国に40数校しかなく、日本と違っていずれも小規模校で、ドイツの全学生数に占める私立大学の学生数は1パーセントに過ぎません。ドイツでは、州立大学は授業料が無料のため、敢えて私立大学を目指す学生は少なく、私立大学もよほど特色のある教育方針や学部学科がないと存在感が薄いのだそうです。我が国の現状と比較するとき、教育に対する政策の大きな違いを感じずにはられません。

同大学は、1743年に設立され、神学部、法学部、医学部、第一哲学部（人文学部人文社会学科に相当）、第二哲学部（人文学部言語文化学科に相当）、第一自然科学部（数学、物理学）、第二自然科学部（生物学、化学、薬学）、第三自然科学部（地学）、経済・社会科学部、工学部、教育学部の11学部のほか、生体医療工学研究センター、社会科学研究センター、地域研究センターをはじめ多くの附属研究センターを擁しています。また、日本の科学技術や政治経済、文化に対する関心が非常に高く、日本学科で学ぶ学生が多数おり、数名の日本人教官も在職しています。

学生数は全学で2万人を超え、常勤の教職員数は9,500人あまりで、学生数においては全国に54校ある総合大学のうち20位です。

山口大学とエアランゲン・ニュルンベルク大学との交流は1994年に遡ります。1994年10月に第二哲学部のBernd Naumann(ベルント・ナウマン)教授が当時の教養部を訪問され、その後、人文学部の本田義昭教授が1996年11月に表敬訪問を、1998年7月から2か月間第二哲学部に研究滞在されました。また、Peter Ackermann(ペーター・アッカーマン)教授が日本学術振興会の外国人招へい研究者として本学人文学部へ45日間滞在されるなど研究者間の学術交流は人文学部、経済学部を中心に着実に進展していきました。

一方、学生の交流も2001年2月26日から3月23日までエアランゲン・ニュルンベルク大学で行われた日本人学生とドイツ人学生が相互に言語を学び合う語学プログラムに人文学部から5名の学生が参加したのを皮切りに、毎年数名の学生が同プログラムに参加し、研修の成果を上げています。

2001年には人文学部の学生1名が1年間の私費留学をし、2002年には同じく人文学部の学生2名が1年間の私費留学をしました。



日本学科山中研究室で意見交換

交流が複数学部にわたって活発化していくに伴い、学術交流協定を締結し、これを更に充実させたいとの方針が出され、これを受けてエアランゲン・ニュルンベルク大学に対して意向を打診したところ、先方も同様の考えであることが確認されました。

交流協定締結に向けて準備を始めるとともに、

TOPICS

文部科学省の「研究環境の国際化推進事業」の派遣事業及び招へい事業に応募したところ、これが採択され、まず、山口大学側から平野充好副学長をはじめ、6名が2003年1月24日から29日にかけてエアランゲン・ニュルンベルク大学を訪問しました。

Karl-Dieter Grüske(カールディーター・グリュスケ)学長、Hartmut Bobzin(ハートムート・ポップツィーン)副学長、Eckart Liebau(エックアルト・リーバウ)第一哲学部長や国際交流課の方々とお会いし、両大学の共同研究、交流の具体的方法や内容等について意見交換を行いました。また、大学間学術交流協定書の文案を持参し、大筋で合意に至りました。

滞在中は大学の施設やエアランゲン市、ニュルンベルク市内を視察する機会を設けていただき、大学の歴史を肌で感じることができました。ドイツの人々の古き良きものをいつまでも大事にする人間性にも触れることができ、大変有意義な事業に参加させていただいたと思っています。

一方、「研究環境の国際化推進事業」の招へい事業として、3月15日から24日までの日程でエアランゲン・ニュルンベルク大学から、Eckart Liebau(エックアルト・リーバウ)第一哲学部長、Bernd Naumann(ベルント・ナウマン)元副学長、Peter Ackermann(ペーター・アッカーマン)日本学科教授、Herta Hafenrichter(ヘルタ

ー・ハーフェンリヒター)国際交流専門員が来学されました。17日に事務局において交流協定調印式を行い、14校目となる大学間学術交流協定校が誕生しました。

一行は、限られた日程の中で吉田地区教官との意見交換のみならず、精力的に宇部地区も訪問し、医学部、附属病院、工学部の施設等を視察しました。特に、工学部においては知能情報システム工学科の教官と討論会を開催し、活発な議論で会場は大いに盛り上がりました。本学にとって、ドイツ国内でも有数の伝統あるエアランゲン・ニュルンベルク大学と学術交流協定を締結できたことは大変有意義なことであり、今後全学的に共同研究をはじめ、学生交流の充実などが大いに期待されるとともに、現在、西欧諸国の大学・研究機関等との協定はまだまだ少なく、今回の協定締結を契機として協定校が増加することが期待されます。

TEL : 083-933-5007

FAX : 083-933-5013

E-mail : a-goto@yamaguchi-u.ac.jp



大学事務局（中央2階建の建物が国際交流課）



ニュルンベルク城の「カイザーブルグ」から望む
ニュルンベルク市街

TOPICS

海外研修を終えて

アメリカ滞在記 ~ オレゴン編 ~

中村 浩子 総務部国際企画課国際交流係

<Office of International Education(OIE)について>

オレゴン州立大学(OSU)は2000年の秋学期の段階で全学生数約17,000人。そのうち留学生の数は約1,200人。うち日本人学生は約110名いましたが、工学系の学部が有名なためか、インドからの留学生が一番多かったです。州立大学の中では中規模のようです。OIEのスタッフは全部で18名、その他Student Workerと呼ばれる学生のバイトによって運営されていました。OIEは大きく二つの部門に分かれています。一つは留学生の受入れに関する部門で、もう一つは、国内学生の海外派遣を担当している部門です。留学生、そして留学を希望するアメリカ人学生は、OIEに行きさえすれば必要な情報の入手が可能であり、窓口のワンドロップ化が進んでいます。また、同一大学とのプログラムの学生の受入れ・派遣を同じ人が担当すると、相手方の大学も混乱を起こすことがなく、事務もスムーズに流れていました。



大学会館のような建物の中です。学生がよくこのソファでくつろいでいます。

<留学生の受入について>

私の印象に残ったいくつかの留学生サービスを紹介します。

- ・ Advising

1,200名もの留学生に対して3名International Student AdvisorがAdvisingを行っていました。相談の内容はビザ、奨学金、授業に関することから個人的な問題まで多岐にわたっており、アドバイザーに会うためには、緊急時を除き、必ず事前に予約を取ることが義務付けられています。また、それとは別に、各々のアドバイザーはWalk-in Hourという予約なしでの相談が可能な時間帯を設けていて、この時間帯だとfirst come, first servedの原則で相談を受けることができます。

・ オリエンテーション

新しく入学する学生のために毎年9月、1週間にもわたってオリエンテーションが開催されます。授業の受け方、履修方法、アメリカでの生活に必要な情報等の提供といった実用的なものから、パーティー、買い物ツアー、ピクニック、フットボール観戦ツアーなどのアクティビティも用意されていて、異国の地で不安を感じている留学生のアジャストメントのために必要不可欠なイベントです。

・ 家族へのサービス

特に私の興味をひいたのが、留学生と一緒に渡米してきた配偶者へのサービスです。夫婦で常に行動を共にするアメリカならではのサービス



オレゴン州立大学にある桜です。

TOPICS

れませんが、家にこもりがちで外の世界との交流を持ちづらい配偶者のために大学が無料の英語の授業を開設したり、アクティビティを企画して配偶者を招いたりしていました。

- ・留学生と地域社会との交流

ユニークな奨学金事業で、留学生が地域の小・中・高等学校等へ出向き、自国の文化を紹介する代わりに、年間の授業料を一部免除してもらえるプログラムで、キャンパス外でのアルバイトが禁じられている上に高額授業料を納めなくてはならない留学生にとっても、また、地域社会にとっても有益なプログラムです。

<学生の派遣について>

海外留学プログラムは、OSU独自の海外の大学との間のプログラム、Oregon University System(オレゴンにある七つの州立大学によるコンソーシアム)との海外の大学とのプログラム、留学派遣エージェンシーを利用したプログラムの3種類があります。こういったコンソーシアムやエージェンシーを利用するメリットは言うまでもなく、OSU 大学のみでは実施不可能である多種多様なプログラムを学生に提供できるということです。留学に必要な情報、アドバイス等はOIEの海外留学担当coordinatorからうけるのですが、coordinatorは留学経験を持つ人が多く、自分が留学生として訪れた地域・国のプログラムを



オレゴン州立大学の事務局です。

担当するというシステムを取っていました。また、彼らはOSU独自のプログラムについては、派遣者の選考も行います。その際、精神面から見て留学が可能かどうかの判断については専門のカウンセラーの意見も参考にされるようです。出発前にはオリエンテーションも行われ、留学中の健康管理、精神面の準備、また、必要な事務手続きの説明等が行われ、学生の海外派遣についてのサポート体制はかなり整っている印象を受けました。

<連載を終えるにあたって>

最後になりましたが、改めて1年を振り返ってみると多くのことを学べたと実感しております。アメリカ滞在中、「ここで学んだことをどうやって日本で生かすの?」とよく質問され、それが一番の課題であることを帰国後常に実感しています。まだまだ書きたいことはあるのですが、このような研修の機会を与えていただいたことに感謝の意を添えてこの連載を終わらせていただきたいと思います。

TEL : 083-933-5207

FAX : 083-933-5029

E-mail : SH034@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp



アメリカの探検家Lewis and Clarkの探検の最終地です。Lewis and Clarkとはアメリカでは歴史で必ず習う人物で、西部の開拓に貢献した人達です。

TOPICS

進水式

新艇「はやぶさ」進水式

山口大学監視・救助艇「はやぶさ」の神事及び進水式が平成15年3月6日(木)9時15分から秋穂漁港で執り行われました。

本艇は平成11年9月の台風により使用できなくなった前監視艇「ふしの」に代わる監視・救助艇であり、落水者の人命救助における身体保護並びに救助者の転落保護のための艀装を施し、速度18ノット以上、風力4ないし5までの耐航性能を備え、小型船舶4級免許で操縦できる艇です。

仕様

それでは、ここで「はやぶさ」の仕様について紹介させていただきます。

船体(材質:FRP)の長さは25フィート(7.5メートル)

推進機関船外機は、2機2軸、合計馬力80以上で、2006年ガス規制クリアーしたものを設置

プロペラガード(材質:ステンレス)を設置
夜間航海灯を設置

探照灯として、リモコン式サーチライト(照度:DC12V,30,000cd以上)を2箇所設置

6.5型カラー液晶GPS測探機(ナビボックス含む)を設置

その他安全航行、ヨット等曳航業務が行えるような設備一式



神事及び進水式

当日はあいにくの悪天候でしたが、加藤学長をはじめとして、道管学務部長、秋穂漁業協同組合長田辺様、並びにヨット部艇庫の地主である多田様を来賓に招き、ヨット部員を含め約30名が列席しました。

まず神事では、正八幡宮宮司により御祭が司られ、引き続き進水式では加藤学長による挨拶、ヨット部員の謝辞と続き、本学文化会吹奏楽部による「ワシントンポスト」の演奏で進水に華が添えられ、無事式典を終えることができました。

式典終了後は、ヨット部艇庫において女子部員によりカレーライスが振る舞われ、参加者は舌鼓をうちながらヨット談義に花が咲き、和やかなうちに行事が終了しました。

終わりに本学ヨット部では、前監視艇「ふしの」の廃船により、思うような練習ができない状況にありましたが、「はやぶさ」を配置したことにより、今後安全第一に十分な練習を積み、より一層の活躍に期待したいものです。

(文責/学務部学生生活課専門職員 砂田典明)

TEL:083-933-5159

FAX:083-933-5040

E-mail:GA110@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp



TOPICS

サークル活動

体育系サークルリーダー合宿研修に参加して

平成15年3月14日（金）から3月16日（日）までの2泊3日の日程で、山口県光青年の家において本学体育系リーダー合宿研修が開催されました。

この研修会では、各サークルの「幹部」と呼ばれるリーダー達が合宿を通じて、リーダーとしての資質を養うとともに教職員及びサークル間での親睦と理解を深め、サークル活動のさらなる向上を図ることを目的とし、体育会総務の企画・運営によりこの時期に毎年実施されています。

初日は午前8時に出発式が行われ、体育会総務より、この2泊3日の合宿研修を通じて「自分なりに少しでも多くの何かを見いだしてください」との挨拶の中で、参加者全員の意志疎通が行われ、一路合宿地に向けて出発しました。午前10時には無事に光青年の家に到着し、すぐに入所式・オリエンテーションが始まりました。入所式では、当青年の家の方から「2泊3日の集団宿泊生活の中で討議やレクリエーション等の幅広い体験活動を基に、規律正しく、友愛に結ばれた、実践力の豊かな人間づくり」を目指して研修してほしいとの諸注意があった後、早速研修へと移りました。

会議式研修

今回は、体育会総務及び31サークルから150名が参加し、「話し合うことの重要性」をテーマに班別、サークル別に分かれ、各班長の司会進行により会議式研修で行われました。

私も、こういった形式の職員研修には何度か参加したこともあるため、大変興味深く各班の進捗状況を見て回りました。

当初は各班のメンバー同士お互い初対面ということもあり、自己紹介でお互いを知ることから始まったようで、それぞれのメンバーもすぐにうち解け、これからのサークル活動において、活発な意見交換がスムーズに行われる兆しが見えました。また、昼食後はレクリエーション（クイズラリー）で各班ともこれから研修するうえで、最も大切なコミュニケーションが図られたように思います。

各班での討議内容も様々ですが、会議式研修では、「自分の意見を素直に述べる、人の意見を謙虚に聞く、話を独占しない、討議の本題からはずれない」等の基本的事項がありますが、進行役は、討議の視点として、グループ内で意見が分かれるところについては無理に一つの結論を出そうとはせず、決められた時間内で幅広くメンバーの意見が出るよう配慮しながら進められており、内容としては、サークル内での人間関係（上下関係）あるいは、目的意識の相違等の悩みを持った意見が思ったよりも多いのに驚かされた部分もありますが、それらの問題点をこれからの討議のなかで、いかに克服していくかについて話し合いが進められていったようです。

事故と安全対策

2日目には本学保健管理センター所長の平田牧三先生を講師に迎え、「スポーツ事故と安全対策 リーダーとしての視点から - 」の演題で講演が行われました。

本講演では、特に致死的な重症例に焦点を当て、その事故防止対策やリーダーのリスクマネジメントのあり方についての提示、本学での過去の事故事例がとりあげられ、こういった事故に対する安全対策についての具体的な話があり、各リーダー達は熱心にメモをとりながら真剣に聞き入っていました。

これからは新生が入部する時期ですが、各リーダーにおいては今回の講演を基に下級生部員の指導にあたってくれるものと思います。

まとめ

さて、3日目、こうして班別討議を7回、サークル別討議を2回行い、各班がこれらの討議成果を持ち寄って参加者全員で全体討議に入りました。今回の研修では「事例」を基に討議が行われていないため、結論は出ておりませんが、今回のテーマである「話し合うことの重要性」について活発な討議が行われました。

TOPICS

終わりになりますが、今後この研修に参加したリーダーはチームの目標を明確にし、チームのメンバーが協力して組織目標を達成できるようにリーダーシップを発揮できるような働きをしてほしいものと切に願います。

また、今回の研修を肥やしに各サークル内においてこういった研修会を開き、お互いが本音の部分で話し合いができる雰囲気作りをし、本学の体育系サークルがより一層発展することを願って止みません。

(文責 / 学務部学生生活課専門職員 砂田典明)



医療技術短期大学の閉学記念式典を挙行

塚原 正人 教授 (医学部保健学科長)

医療技術短期大学部では、平成12年10月に医学部保健学科に改組・転換され、今年3月に全学生が卒業したことにより、3月末をもって閉学しました。昭和54年10月(1976年)に開校して以来、「心に愛を、手に技を」の校訓のもとに、これまでに看護学科1,654名、衛生技術学科773名の計2,427名の卒業生を社会に送り出してきました。閉学に伴い3月26日、国際ホテル宇部において、学内外の関係者や教職員OBなど多数の出席を得て、閉学記念式典を挙行しました。

式典では、加藤学長の式辞の後、藤井山口県医師会長(代読)、佐久間山口県健康福祉部長、村田山口県看護協会会長、三輪山口県臨床検査技師協会会長の来賓祝辞がありました。祝辞では今日までの24年間の軌跡とともに、本学が優秀な医療人を輩出し、地域医療に対して多大な貢献を果たしてきたことが改めて披露されました。最後にこれまでの暖かい支援に対する感謝と今後への抱負、現代医療が求められる負託に応える決意を述べ、謝辞としました。



式典後には記念懇親会が催され、沖田附属病院長の挨拶の後、松 評議員の発声で乾杯を行い、三代三分一政男学長、四代村上恵学長、初代松本昇部長、二代友永進部長の来賓挨拶がありました。また教職員OBなどから設立当時の楽しい思い出などが紹介され、懇親会は終始和やかな雰囲気の中に進みました。参加者からは医療技術短期大学の閉学を惜しむとともに、医療の先進化・高度化に対応できる優秀な医療人を育成していく使命をもった医学部保健学科の大いなる飛躍を期待する声が上がりました。終わりに、開校以来在職し、本学とともに歩んで来られた岩田隆子教授が閉会の乾杯の発声を行い、懇親会は盛会裡に終了しました。

また、閉学当日の3月31日には、加藤学長、櫻井事務局長とともに医療技術短期大学部銘板の取り外しを行いました。

TEL : 0836-22-2002

FAX : 0836-22-2130

E-mail : masato@yamaguchi-u.ac.jp



私の授業

寿司職人を目指して



紺泉《untitled IK0004 (鉄火巻)》《untitled IK0005 (たこ)》
《untitled IK0006 (サーモン)》
2000年、アクリル、水彩、墨、綿布・パネル
各11.0×18.0cm
写真提供：ナガミネプロジェクト

藤川 哲 講師
人文学部 人文社会学科
社会情報学講座

寿司屋が好きだ。相応の年齢になったら蕎麦屋で時間をかけてゆっくり飲むのもいいかもしれないが、今はシンプルなそばの悦びより、バラエティに富んだすしの悦び。山口では、小さな子供を連れて行ける回転寿司のレベルが高い。夫婦二人きりで出掛けたくくなるような寿司屋は、ちょっと先の楽しみということにしてある。

そんな想像の世界の寿司屋は、すしの旨いのはもちろんのこと、主人は話好きだがでしゃばらず、内装、雰囲気よく、茶がうまい。客の入りも多すぎず少なすぎず。万事よく、家に祝い事があれば出掛け、友が来ればまた出掛けたくくなるような店だ。ポイントは店の主人。仕入れの目、人を見る目、味のセンス、話のセンス。ココロニクイ、と思わずうなってしまう程の心遣い。

「理想の寿司屋」の話は前職の美術館学芸員時代に考えた。実際には使わなかったが、「ホワイト・キューヴは誰のもの？」というタイトルで、公立美術館のあり方をテーマにした市民講座の対談者の一人として呼ばれた時、仕込んでおいたネタだ。ホワイト・キューヴというのは真っ白な箱型の空間。近代以降、主流となった美術館展示室

の特徴を表す表現で、美術作品を見せるための中立で無機質な環境を装いながら、実は略奪や支配の歴史を脱色してしまっているということに気づかせ、信頼のおけない「白」であることに注意を向ける。講座を企画した側の意図は、公立美術館は本当にそれを支えている市民のものなのか、というところ。そこで私は、「美術館の展覧会を企画する学芸員は寿司職人のようなものだ」というストーリーを考えた。学芸員は、活きの良い作家と最上の作品を仕入れてお客さんを待っている。公立美術館を是非あなたの行きつけの寿司屋にして欲しい、という訴えだ。事実、自分の勤務先の美術館は、自分の顔、自分の店という意識で、あらゆる面に気を配った。

大学の講師となった現在、自分の店は大学の教室、自分の出し物は専門の講義、という次第。活きの良いネタを仕込んで開店にのぞむという心構えに変わりはない。ただし2年目を迎えて思うことは、今年は店に来るお客さんの顔を全部覚えたいな、ということ。残念ながら人の顔を覚えるのは苦手な性質だ。でもだからこそ、一人一人をちゃんと意識して講義が出来るようになりたい。幸い、美術史は、知的な興奮を伝えるだけでなく、感動を共有し波動させることも可能な学問だ。心の中にコトリと落とし込む、そしてじわっと広がる。毎回簡単なアンケートに感想を書いてもらっているが、山大は言葉の一番いい意味での「素直」な学生が多く、語りかけ甲斐がある。こんなしあわせなことはない。

この原稿を寿司ネタで書こうと決めて、しばらく時間を置いていたら、全然別の寿司ネタを思い出した。そういえば、私が大学で習った美術史の先生は、講義中、よく右手の人差し指と中指をそろえて、話ながら胸の前で軽く泳がせ、話がポイントに来たところで、ぽんと左の手のひらの上にその2本の指を重ねる仕草をすることから、「あの先生は授業中にすしを握っている」と友人が教えてくれたことだった。

(E-mail)
fujikawa@yamaguchi-u.ac.jp

私の研究

地質現象の周期性



宮田雄一郎 助教授
理学部化学・地球科学科
地球科学講座

地球的時間感覚

地球の環境変化の歴史は、日常感覚から遠く離れた何十億年も長さがあります。しかし、それを見る時間スケールによって歴史はまったく違って見えることが少なくありません。例えば、1万年スケールでみると、間氷期はせいぜい1-2万年しか続かず、氷期に戻っていくことが明らかになってきました。現在は間氷期になってすでに1万年近く経っていますから、遠からず安定した温暖期は終わりを迎えることになります。これに対して、現在の地球の温暖化は100年スケールで、100年後には温暖化に伴う海面上昇や食糧危機などが懸念されていることは周知のことです。このような100年スケールの激しい気候変動は氷期においても起こったことが知られています。つまり、時間スケールの違った地球上の様々な現象が重なり合っているということができるといえるでしょう。このような過去に起こった現象は、地層を解読することで得ることができます。私の研究は、このような地層に記録された情報を得ることです。

何が時計になりうるのか？

地球の環境変化では、その変化のスピードが問題になります。それを知るには時計になるものが必要で、地質学者は、スケールの違った時計を使い分けてきました。しかし、どこでも利用できて、しかも精度と長さ（古さ）の保証される方法はまだありません。そこで、一定の周期を刻む現象に

目をつけました。12時間及び1か月周期の潮汐や1年周期の季節変化、11年周期などをもつ太陽活動などです。しかしこれらを記録した地層は、決して多くありません。近年では、日射量が2万年と4万年の周期をもつことが、氷期・間氷期サイクルと連動することから、100万年前の地層においても数千年単位で年代目盛りを与えることが可能になっています。地層の堆積の速度は決して一定ではありません。しかし、堆積速度の支配メカニズムがわかれば、さらに一桁精度を上げることができそうです。

ペースメーカー

地層の堆積過程においても、いくつかの周期性が見つかってきました。例えば、砂を一定の速度で供給しても、分かれた層をなして堆積します。なだれを起こして堆積する場合、不規則あるいはフラクタル的な周期性を示すこともあれば、一定の周期の現れることもあるということがわかってきました。這りと停止を繰り返すスティックスリップも地震のような地質現象だけでなく身近にもあって、時として非常に規則的です。また、時間的な周期性だけでなく、空間的な周期性が地層中に記録されていることも少なくありません。たとえば、リップルとよばれる砂の表面模様（図1）やベイン構造とよばれる割れ目列（図2）などの現象にも興味を惹かれます。したがって、私の研究室ではこれまでとくに対象を限定せず、また手法もフィールド調査・モデル実験・シミュレーションとさまざまです。山口大学に赴任してちょうど十年になりますが、その間に卒論学生や院生の諸君らと取り組んできたテーマについては、ホームページにも載せています。

(<http://www.cc.yamaguchi-u.ac.jp/~ymiyata/index.html>)



TEL : 083 - 933 - 5747

(E-mail)

miyata@mail.sci.yamaguchi-u.ac.jp

教官著作書の紹介



『ジュリアン・グリーン研究序説 『幻を追う人』『モイラ』の読解』

(人文書院 2002年8月30日)

本書は、20世紀フランスを代表するカトリック作家、ジュリアン・グリーンの中の二つの小説を論じたものです。グリーンは、日本ではあまり知られていませんが、フランスでは、1998年に他界するまで、文壇の大御所的存在でした。このグリーンの世界群の中から、『幻を追う人』という中期の小説と、『モイラ』という後期の小説を選び、読解・分析をこころみました。

グリーンの世界は、幻想と宿命の世界と規定できると思います。本書の前半では、『幻を追う人』に表現された幻想がいかなるものであるのか、後半部分では、『モイラ』のなかで宿命性がどのようなかたちで言い表されているのか、を問題にいたしました。本書はたった二つの作品を論じたものにすぎませんが、グリーンの世界全体を視野に入れているので、グリーンの世界への良き入門書であると同時に、今後の本格的なグリーン研究に道を開くものであるといえるでしょう。

井上三郎 教授 人文学部 言語文化学科
TEL.083-933-5261
E-mail : s.inoue@yamaguchi-u.ac.jp



『時間は実在するか』

(講談社現代新書 2002年刊)

「時間特有の変化においては、過去・現在・未来は、両立不可能であると同時に両立可能でなければならない。これは矛盾である。ゆえに、時間は実在しない」という証明を、20世紀英国の哲学者マクタガートは試みました。

本書は、このマクタガートの証明をていねいに解説し、その内側に深く入り込んで徹底的に検討・批判し、さらにそこから離脱して、新たな時間の形而上学を構想します。その構想においては、「とりあえず」という時間性、無でさえない未来、この今の現実性、現在だったことのない過去などを論じています。

森岡正博氏には「日本にはオリジナルな哲学がないと、いままでさんざん言われてきたが、そんなことはない。入不二さんのこの本は、自分の頭でとことんまで考え抜かれた独創的な哲学書だ。[・・・]「時間」に興味を持つすべての人のための必読書である。」(信濃毎日新聞2003年3月9日版書評)と評していただきました。

入不二基義 助教授 教育学部 時間学研究所主任研究員
TEL.083-933-5431、E-mail : irifuji@yamaguchi-u.ac.jp



『道徳意識の社会心理学』

(北樹出版 2002年5月)

近年、青少年の犯罪や問題行動がマスコミの注目を集め、青少年における道徳意識の低下が指摘されています。そして、こうした状況の中で、教育行政は、「心の教育」や「情操教育」の充実といった施策によってこの問題を解決しようとしています。

しかし、そもそも「道徳」とは、個々人の「心」の問題なのでしょうか？たとえ個々人がどんなに善意でも、また愛国心や郷土愛がどんなに強くても、複雑な制度と多元的価値に取り囲まれた現代社会では、解決できない問題がたくさんあります。この点に着目するならば、むしろ「道徳」とは、様々な他者や組織の観点から問題を捉え直したり、対話することを通じて、行為葛藤を調整することとして理解されることとなります。

本書では、このような立場から道徳意識の形成を論じたローレンス・コールバーグ(1927-1987)について、その思想的背景や理論的含意の検討を行っています。

高橋征仁 助教授 人文学部 人文社会学科
TEL.083-933-5243、E-mail : takahasi@yamaguchi-u.ac.jp



教官著作書の紹介



『岩波小辞典 現代の戦争』

(岩波書店 2002年5月刊 全345頁)

本書は、著名な軍事評論家である前田哲男（東京国際大学教授）、気鋭の国連研究者である河辺一郎（愛知大学助教授）の両氏と纈纈の三人による共同研究の成果である。“読む辞典”のコンセプトのもと、現代世界の動向を射程に据えつつ、戦争と軍隊についての情報を最新の研究成果を踏まえながら平易に解析している。内容的には、日本とアジア、そして、世界との関係を共通の安全保障や人間の安全保障の観点から捉えることに主眼を置いた。このうち纈纈は、「アジア太平洋戦争」や「満州事変」など、日中近現代史関係から、自衛隊関連事項、南北朝鮮、朝鮮戦争、中ソ対立、中台紛争など、アジア諸国の政治軍事情勢と紛争に関する事項を担当執筆している。

イラク戦争後の今日にあって、「現代の戦争」をキーワードに、日本を含めた21世紀のアジアや世界を捉え直す作業が強く求められており、編集担当者によれば、本書はそうした要請に応える企画として多くの読者を獲得しているとのことである。

纈纈 厚 教授 人文学部 人文社会学科
E-mail : koketsu@yamaguchi-u.ac.jp



『市場のアノマリーと行動ファイナンス』

(千倉書房 2002年9月10日刊)

本書の中心的テーマは株価が情報にどのように反応するかを検証することです。株式市場の参加者は情報に基づいて株を売買します。情報はテレビ、新聞、インターネットなどからだれでも入手できるものもあれば、企業で働いている人でない限り入手できない内部情報などがあります。もし情報がある企業にとって好ましいもの、たとえば企業の業績が予想以上に良くなったとするならば、株価は上昇しますし、反対であるならば株価は下落します。では、株価はいつ上昇、あるいは下落するのでしょうか。従来の支配的な理論はわれわれが情報を入手する以前か入手後すぐに株価に反映されるということでした。

ところが、本書の実験によれば、短期的には、好ましい（悪い）情報については株価の上昇（下落）が持続する傾向にあることを、長期的（3～5年）には極端に上昇（下落）した株は下落（上昇）する傾向にあることを明らかにしました。

城下 賢吾 教授 経済学部経営学科
E-mail : sirosita@po.cc.yamaguchi-u.ac.jp



新聞掲載された山大・地域から見た山大

3月

電話無料相談の窓口 ～女性の尿漏れ～

3月10日から山大附属病院などで開設

(宇部時報：2月27日)

ネットで遠隔授業 - 宇部 -

山大教授と神原小児童

(宇部時報：2月27日、山口・宇部時報・1日)

宇部、「医療」で巻き返し 機器の研究開発施設、来月開設

すき間商品を創造 産学官連携地域再生狙う

(日経：4日)

源氏物語を読破しよう

受講生100人が夢の54巻間近

- 山口大元教授を講師に -

(朝日：4日)

独自長期目標3方針固める

山大で運営諮問会議

(山口・朝日：5日)

柿の発芽日分かります

山大教授ら予測システムを開発 - 霜害対策も可能

(毎日・朝日：5日、読売：8日)

ごみ分別の大切さ実感

留学生対象に初の見学会

山大12人リサイクル施設へ

(宇部時報：5日)

山大工学部 学生が出前授業 - 上宇部小6年 -

ウインチの仕組み学習

(宇部時報：5日)

電波天文学の研究活動紹介

7日山大で討論会

(山口：5日、西日本・サンデー山口：7日)

医師派遣の存続山口大側の要望 - 萩の34団体 -

(山口：7日)

20日、山口大で 超高速ネット・シンポ

(サンデー山口：8日)

西条柿(美東特産)の発芽日予測

- 山大教授らがシステム開発 -

霜害防止へ期待

(読売：8日)

県立大と山口大が結婚テーマに演劇

山口で公演始まる

(中国：9日)

春 新たな1歩 万歳! 私も山口大

前期試験1,421人合格発表

(中国・山口・朝日・毎日：9日)

自然災害研究協西部地区部会研究発表会に参加して

山口大工学部教授 山本 哲朗氏

自然災害時に求められる速やかな情報伝達

(宇部時報：10日)

山口大と国立天文台 共同研究記念し討論会

望遠鏡運用1年、成果など発表

(読売：11日)

「すてきな空間、後生に」

山大職員宿舎で主婦4人展 建物保存を訴える

(読売：11日)

狭心症や脳卒中 青魚から“特効薬”

EPA血管の異常収縮を防ぐ

山口大・小林教授チームが解明

(読売・朝日・毎日・西日本・山口：12日、日経：17日)

「女性診療外来」を開設 - 山大病院 -

あらゆる病気対象 大学病院で全国で全国初

同性スタッフで安心対応

(宇部時報：12日、中国・毎日・朝日・読売・

西日本・山口：13日)

「後期」に1,469人 山口大・県立大入試

(中国・朝日：13日)

図書館長に福政氏 - 山口大 -

(山口・中国：13日)

自然災害と節句 山口大学工学部山本 哲朗教授

(ウベニチ：15日)

自然災害を考える 山口大学工学部山本 哲朗教授

岩国工で地震メカニズムなど解説

(防長：19日)

山東省が山大教授に賞

科学技術奨 克ローン牛研究指導で

- 山口大鈴木 達行教授 -

(読売：18日、中国：20日)

児童らが無重力実感

宇宙への好奇心強める - 山大工学部 -

(宇部時報：17日)

山口大・宇部高専 教材用ロボットを開発

機能の拡張性を追求 製品化と販売目指す

(宇部時報：17日)

キャンドルで開戦反対

山大教授ら街頭で訴え - 山口市 -

(朝日：20日)

「山大ALICIA B」がステージ優勝

毎日ジャパンカレッジカップ

(毎日：20日)

自然災害を考える 山口大の山本 哲朗教授

岩国工で地震メカニズムなど解説

(防長：19日)

4人の学術研究に援助金 - 宇部興産学術振興財団 -

山口大医学部教授、浜野 公一氏・整形外科助手、村松

慶一氏

(毎日：25日)

新聞掲載された山大・地域から見た山大

後期日程689人合格 - 山大 - (山口: 25日)

県産学官共同研究 02年度は308件
技術移転、目標達せず (山口: 25日)

社会貢献誓いの春

山口大・徳山大・徳山女子短大で卒業式
希望抱き学びやに別れ
(中国・毎日・山口・読売・朝日: 26日)

村山さんら山大生21人の功績たたえる
常盤工業会の常盤賞表彰式 (宇部時報: 28日)

4月

ペット生き返らせます
~ 山大元教授会社を設立へ ~
体細胞を冷凍保存 クローン技術確立後ですが...
(朝日・毎日・日経・西日本・山口: 2日、
読売: 3日、中国: 4日)

2,763人希望に胸膨らむ 山口大入学式 -
学長「責任から逃げぬ心を」
(西日本・朝日・読売・中国・山口・毎日: 4日)

経産省が提案を採択 - 山大大学院理工学研究科 -
技術経営の教材開発へ (山口: 5日)

高校教諭に研究紹介へ - 山大大工学部 -
「レベルアップ」要望に応え (山口: 5日)

女子大生がベンチャー支援基金
- 山口大の3人自らも起業家 -
目標1,000万円出資者募る (読売: 5日)

MOT教材開発 - 山大大学院 -
来年度コース設置で (日経: 11日)

災害者への地震対策を期す
山口大工学部教授 山本哲朗氏
寝室は転倒・落下物避け、部屋の構造を強化
(宇部時報: 11日)

北京市幹部研修受け入れ延期 - 山大 -
(山口: 12日)

徳山サテライトカレッジ
来月から、受講募集 - 山大人文学部 -
(山口: 12日)

県議選をみて 山大人文学部(都市社会学)

小谷 典子教授に聞く
「パイプ役」通用せず定数論議価値示せ
(朝日: 15日)

県議会への視点 寄稿
山大経済学部教授 吉村 弘氏
議会の存在感の希薄さ (山口: 15日)

山大文化会表現系フラクション
23日から3日間「芸術祭」 (サンデー山口: 18日)

医療・福祉の新開発拠点
待望の市MCCが開所
(宇部時報: 16日、読売・西日本・毎日・中国・日経:
17日)

この30年以内に起きる確立の高い南海地震<上>
山口大工学部教授 山本哲朗氏
津波によって大被害 (防長: 19日)

『暴力は暴力を生み出すだけ』
- 山大生が主催・山大で講演会 -
イラク戦争や中東問題巡り (朝日: 20日)

教育改革フォーラム
教育改革の推進と教育基本法の改正について
5月17日(土) 13:30~16:00 山口南総合センター
(朝日・中国: 24日)

山菅弦楽団が合同演奏会 ~ ブ람スの交響曲第3
番など披露 ~
5月3日、山口市民会館 (サンデー山口: 26日)

山大で前期3、後期3講座
やまぐちサタデー・カレッジ (防長: 26日)

この30年以内に起きる確立の高い南海地震<中>
山口大工学部教授 山本哲朗氏
津波が惨事を拡大 (防長: 27日)

再生の主役 大学発ベンチャー
技術の種 自ら製品化
規制緩和や基金が後押し (日経: 30日)

春の叙勲 勲一・二・三等海外関係分
水野 恭之(元山口大教育学部長)
時弘 義雄(山口大名誉教授)

公開講座のお知らせ

講座名	開設期間	受講対象者	開催会場	問合せ先
異文化交流コース 「死を前にした中国人たち」	5月10日(土) 〃 7月5日(土) [毎週土曜日開講]	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 4月上旬 ~ 5月8日)
やまぐち学コース 「山口の民俗」	5月10日(土) 〃 6月28日(土) [毎週土曜日開講]	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 4月上旬 ~ 5月8日)
外国語学習コース(英語) 「英語で学ぶ ロンドンの歴史と文化」	5月10日(土) 〃 7月5日(土) [毎週土曜日開講]	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 4月上旬 ~ 5月8日)
理科実験講座	8月7日(木) 〃 8月8日(金)	小学校教諭 中学校教諭	山口大学 教育学部 講義室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 7月1日 ~ 7月25日)
木工入門	8月29日(金) 〃 8月31日(日)	市民一般	山口大学 教育学部 木工加工 実験室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 7月1日 ~ 8月22日)
ヒューマンスクール ～表現すること～	10月1日(水) 〃 12月10日(水) [隔週水曜日開講]	市民一般	山口大学 教育学部 講義室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 9月1日 ~ 9月25日)
女性のための講義と実習 による健康教育講座: 基 礎 編	10月6日(月) 〃 11月22日(土)	宇部近郊に 在住する中・ 高年女性	宇 部 市 館 武 道 館	山口大学医学部庶務係 TEL 0836-22-2007 住所 宇部市南小串1丁目1-1 (募集期間 / 未定)
日本文化コース 「歌と言葉」	10月4日(土) 〃 12月13日(土) [毎週土曜日開講]	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 4月上旬 ~ 10月2日)
外国語学習コース (フランス語) 「ペローの童話を フランス語で読む」	10月4日(土) 〃 11月29日(土) [毎週土曜日開講]	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 4月上旬 ~ 10月2日)
現代文化コース 「美的に生きる」	10月4日(土) 〃 12月13日(土) [毎週土曜日開講]	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 4月上旬 ~ 10月2日)
身近な化学とバイオを 体験しよう	10月を予定	高校生 市民一般 高等学校教諭	未 定	山口大学工学部総務係 TEL 0836-85-9003 住所 宇部市常盤台2丁目16-1 (募集期間 / 未定)
ジェンダーから見た 東アジア・日本社会	11月7日(金) 〃 12月12日(金) [毎週金曜日開講]	市民一般	山口大学 経済学部 講義室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 10月1日 ~ 10月31日)

原稿をお寄せ下さい

広報誌は、学内だけでなく、山口県内の高校以上の教育機関、地方自治体及び主として、中国・四国地区の企業等学内外の約500の機関に配布します。

ア. Q&A欄について

山口大学についての質問をお寄せください。質問は、お名前、所属、職（学生の場合は学年）、年齢を付して文書でお願いします。Q&A欄に採用させていただくときには、字数などの関係で文章を一部修正させていただくことがありますのでご了承ください。学外からの質問を歓迎します。

イ. 催し物について

公開講座、学会、研究会等の開催計画がありましたら、日時、場所、名称、責任者氏名、所属、電話番号などをお知らせ下さい。

ウ. 「私の授業」「私の研究」「国際交流」「山口大学の将来についての提言」など

「私の授業」「私の研究」では、日頃おやりになっていることを、高校生にもわかるように、やさしく述べていただければと存じます。また、昨今、大学の将来についての関心が高くなっています。そこで、山口大学の将来あるべき姿について、学内外から原稿をいただければ幸いです。建設的なご意見を期待します。

【執筆要項】

上記ウについて、執筆要項は次のとおりです。

1. 原稿（図、表を含む。）は40字×40行で、できるだけパソコンでお願いします。第1行は題名、2行目は氏名、所属部局名、研究室あるいは講座名、職、本文は4行目から始めてください。本文は3～4に区分し、小見出しをつけて下さい。

読者が連絡や質問をされる場合に便利かと思えますので、お差し支えなければ、原稿の末尾に研究室などの電話番号を括弧書きにしてください。

原稿は次のような形になります。

パソコンを用いない場合は、400字詰原稿用紙4枚以内で、パソコンの場合の要領に準じてお願いします。パソコンで原稿を作成された場合、お差し支えなければ原稿と一緒にフロッピーをお貸しいただければ幸甚に存じます。

第1行	題名
第2行	氏名、所属部局名、研究室名、職
第3行	（空白）
第4行	本文始まり
・	
・	
第40行	本文終わり (TEL_____)

2. ご自分が写っている写真を1枚と本文に関連する写真も添付してください。研究や授業の場面の写真を歓迎します。

原稿には締切期限を設けません。適宜、下記までお送りください。そのほか、種々のお問い合わせも下記まで。また、原稿はE-mailで送っていただいても結構です。

〒753 - 8511

山口市大字吉田1677-1

山口大学総務部総務課（総務課広報室）

広報・調査係長 後藤 明利

TEL.083-933 - 5007 FAX.083-933-5013

E-mail:SH011@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp

公開講座のお知らせ

講座名	開設期間	受講対象者	開催会場	問合せ先
異文化交流コース 「死を前にした中国人たち」	5月10日(土) 〃 7月5日(土) [毎週土曜日開講]	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 4月上旬 ~ 5月8日)
やまぐち学コース 「山口の民俗」	5月10日(土) 〃 6月28日(土) [毎週土曜日開講]	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 4月上旬 ~ 5月8日)
外国語学習コース(英語) 「英語で学ぶ ロンドンの歴史と文化」	5月10日(土) 〃 7月5日(土) [毎週土曜日開講]	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 4月上旬 ~ 5月8日)
理科実験講座	8月7日(木) 〃 8月8日(金)	小学校教諭 中学校教諭	山口大学 教育学部 講義室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 7月1日 ~ 7月25日)
木工入門	8月29日(金) 〃 8月31日(日)	市民一般	山口大学 教育学部 木工加工 実験室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 7月1日 ~ 8月22日)
ヒューマンスクール ～表現すること～	10月1日(水) 〃 12月10日(水) [隔週水曜日開講]	市民一般	山口大学 教育学部 講義室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 9月1日 ~ 9月25日)
女性のための講義と実習 による健康教育講座: 基 礎 編	10月6日(月) 〃 11月22日(土)	宇部近郊に 在住する中・ 高年女性	宇 部 市 館 武 道 館	山口大学医学部庶務係 TEL 0836-22-2007 住所 宇部市南小串1丁目1-1 (募集期間 / 未定)
日本文化コース 「歌と言葉」	10月4日(土) 〃 12月13日(土) [毎週土曜日開講]	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 4月上旬 ~ 10月2日)
外国語学習コース (フランス語) 「ペローの童話を フランス語で読む」	10月4日(土) 〃 11月29日(土) [毎週土曜日開講]	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 4月上旬 ~ 10月2日)
現代文化コース 「美的に生きる」	10月4日(土) 〃 12月13日(土) [毎週土曜日開講]	市民一般 学 生	山口大学 人文学部 講義室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 4月上旬 ~ 10月2日)
身近な化学とバイオを 体験しよう	10月を予定	高校生 市民一般 高等学校教諭	未 定	山口大学工学部総務係 TEL 0836-85-9003 住所 宇部市常盤台2丁目16-1 (募集期間 / 未定)
ジェンダーから見た 東アジア・日本社会	11月7日(金) 〃 12月12日(金) [毎週金曜日開講]	市民一般	山口大学 経済学部 講義室	山口大学総務部企画室 TEL 083-933-5006 住所 山口市大字吉田1677-1 (募集期間 / 10月1日 ~ 10月31日)

原稿をお寄せ下さい

広報誌は、学内だけでなく、山口県内の高校以上の教育機関、地方自治体及び主として、中国・四国地区の企業等学内外の約500の機関に配布します。

ア. Q&A欄について

山口大学についての質問をお寄せください。質問は、お名前、所属、職（学生の場合は学年）、年齢を付して文書でお願いします。Q&A欄に採用させていただくときには、字数などの関係で文章を一部修正させていただくことがありますのでご了承ください。学外からの質問を歓迎します。

イ. 催し物について

公開講座、学会、研究会等の開催計画がありましたら、日時、場所、名称、責任者氏名、所属、電話番号などをお知らせ下さい。

ウ. 「私の授業」「私の研究」「国際交流」「山口大学の将来についての提言」など

「私の授業」「私の研究」では、日頃おやりになっていることを、高校生にもわかるように、やさしく述べていただければと存じます。また、昨今、大学の将来についての関心が高くなっています。そこで、山口大学の将来あるべき姿について、学内外から原稿をいただければ幸いです。建設的なご意見を期待します。

【執筆要項】

上記ウについて、執筆要項は次のとおりです。

1. 原稿（図、表を含む。）は40字×40行で、できるだけパソコンでお願いします。第1行は題名、2行目は氏名、所属部局名、研究室あるいは講座名、職、本文は4行目から始めてください。本文は3～4に区分し、小見出しをつけて下さい。

読者が連絡や質問をされる場合に便利かと思えますので、お差し支えなければ、原稿の末尾に研究室などの電話番号を括弧書きにしてください。

原稿は次のような形になります。

パソコンを用いない場合は、400字詰原稿用紙4枚以内で、パソコンの場合の要領に準じてお願いします。パソコンで原稿を作成された場合、お差し支えなければ原稿と一緒にフロッピーをお貸しいただければ幸甚に存じます。

第1行	題名
第2行	氏名、所属部局名、研究室名、職
第3行	（空白）
第4行	本文始まり
・	
・	
第40行	本文終わり (TEL_____)

2. ご自分が写っている写真を1枚と本文に関連する写真も添付してください。研究や授業の場面の写真を歓迎します。

原稿には締切期限を設けません。適宜、下記までお送りください。そのほか、種々のお問い合わせも下記まで。また、原稿はE-mailで送っていただいても結構です。

〒753 - 8511

山口市大字吉田1677-1

山口大学総務部総務課（総務課広報室）

広報・調査係長 後藤 明利

TEL.083-933 - 5007 FAX.083-933-5013

E-mail:SH011@office.cc.yamaguchi-u.ac.jp